

書評

デヴィッド・グレーバー著（酒井隆・芳賀達彦・森田和樹訳）『ブルシット・ジョブ—クソどうでもいい仕事の理論』

（岩波書店，2020年7月，i-viii頁，1-426頁，7-1頁）

アスキュー 里枝*

「もしも一人の人間をすっきり押しつぶし、破滅させてやろうというつもりで、どんな残忍な人殺しでも聞いただけで身震いして腰を抜かすような、最高に恐ろしい罰を科すとしたら、ただ単に一から十まで、全く無意味な作業をさせればいいのだ」(ドストエフスキー『死の家の記録』)

2016年2月26日、『ユダヤ・タイムズ』紙において、驚くべきニュースが報じられた。あるスペインの公務員が、2010年に発覚するまでの6年間、給料を受け取りながら、ほとんど出勤していなかったというのである。なぜそんなことをしたか？その公務員曰く、自分は職場にいてもいなくても同じ存在で、毎日の仕事が無意味で虚しかった。だから、「自らの人生にとって有意義なこと」がしたくて、自宅でスピノザの研究に没頭することにしたのだ、と(20頁)。

捉えようによってはコミカルにさえ聞こえるこのエピソードは、しかし、現代社会の悲痛な一面を物語っている。それは、無意味な仕事の存在と、それが人に及ぼす「精神的暴力」である(7頁)。この記事は、デヴィッド・グレーバー(David Graeber)の近著、『ブルシット・ジョブ—ひとつの理論』(Bullshit Jobs: A Theory)でも紹介されているものだが、グレーバーはこのような、無意味な書類仕事、社会に何の貢献もしていない無駄な仕事のことを、タイトルの通り、「ブルシット・ジョブ」と呼んでいる¹。それは、「非雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど、完璧に無意味で、不必要で、有害でもある雇用形態」なのである(27頁)。

ここで気を付けなくてはいけないのは、「ブルシット・ジョブ」というのは、グレーバーの呼ぶ「シット・ジョブ」(shit jobs)とは別物であるということだ。「ブルシット・ジョブ」とは、基本的にホワイトカラーの無意味な仕事のことだが、これに対して「シット・ジョブ」は、清掃員などのように、低賃金で「きわめて冷遇されている」ブルーカラーの仕事のことである(33

* 執筆者：アスキュー 里枝

所属/職位：立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部/非常勤講師

連絡先：〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

E-mail: riaskew@hotmail.co.jp

頁)。惨めだという点では、どちらも同じだが—もちろん、グレーバー自身が認めているように、清掃員であることに幸を見出している人も中にはいる—、「シット・ジョブ」の方が役に立ち、社会に必要とされている仕事であるという点において大きく異なる^{2,3}。

グレーバーが最初に「ブルシット・ジョブ」について論じたのは、2013年に『ストライキ!』(Strike!)に発表された、「ブルシット・ジョブ現象について」(“On the Phenomenon of Bullshit Jobs”)という論文においてである⁴。近年、先進国においてこうした無意味な仕事、つまり「ブルシット・ジョブ」が目ざましい勢いで増えているという、センセーショナルな内容を論じたこの論文は、たちまち世界各地で反響を呼び、日本を含む世界中の読者から数多くの共感・実例が寄せられたという⁵。これらの声を纏めて一冊の本として出版したのが2018年の本著で、これがさらに話題を呼び、2020年、ついに待望の邦訳『ブルシット・ジョブ—クソどうでもいい仕事の理論』が公刊された。

スペインの公務員の例を、非効率な役所の問題として片づけるのは早計である。確かに、資本主義社会における無意味な書類仕事は、役所の代名詞で、これまでの常識では主に公共部門に属するものだった。グレーバーの本の新しさは、こうした「ブルシット・ジョブ」が、効率を追求するはずの民間部門においても存在していて、しかも近年激増している、という現代資本主義社会のタブーに切り込んだ点にある(37頁)。グレーバーが言うように、「資本主義に対する不平はふつう、それがあまりに効率的すぎる」ことにあった(37頁)。ところが現実には、驚くべきことに、全く正反対の現象が起こっているのである。

もちろん、日本の「窓際族」という言葉にもあるように、民間においても無駄な役職が存在していることは、ずっと以前から知られていた。しかし、それが今や世界的にも一握りの人間のものでないことが明らかになっている。グレーバーによれば、2015年にイギリスのYouGovが行った世論調査では、あなたは「世の中に意味のある仕事をしていますか?」という質問に対して、「していない」と答えた人がイギリスで37%にものぼった。オランダでも同様の世論調査が行われたが、40%が「していない」と答えたという(12-13頁)。

さらに深刻なのは、本来意味のある仕事(例えばグレーバーは学者で、本来なら意味ある仕事である)をしている人までもが、無意味な書類仕事に多くの時間を奪われるという、「実質ある仕事のブルシット化」が起きており、ますます加速している点である(187頁)⁶。「ブルシット・ジョブ」は今や「深刻な社会問題」(198頁)なのだ。昨今AIの導入などによって、あらゆる場面で機械化・効率化が進んでいるにもかかわらず、一体なぜこんなことが起きるのか?

まずグレーバーが指摘するのは、こうした無意味な仕事の氾濫が、皮肉にも機械化・効率化によってもたらされたという点である。すでに1930年にジョン・メイナード・ケインズが、将来、テクノロジーの進歩によって、少ない労働時間で生産性を上げることができるようになり、20世紀の終わりには、イギリスやアメリカなどの国で週15時間労働が可能になるだろうと予言していた。しかしこの予言は、見事に外れた。もちろん技術的には生産性は上がり、短時間労働

働そのものは可能になった。ところが進化したテクノロジーは、私たちがやらなければいけない多くの仕事から解放した一方で、新たにやらなくてもいい「無意味な仕事」を大量に創り出した（3頁）。実際テクノロジーは、私たちの労働時間を短くするどころか、私たちが「よりいっそう働かせるため」に活用されてきたのである（3頁）。

こうしてブルシット・ジョブは増産され、「とりわけヨーロッパや北アメリカでは、膨大な数の人間が、本当は必要ないと内心考えている業務の遂行に、その就業時間のすべてを費やしている」という事態になった（3頁）。1910年と2000年の、アメリカにおける雇用を比較する報告書によれば、約一世紀の間に、工場労働者や農業従事者など、「生産に携わる仕事」に従事する人の数は機械化によって激減したが、「金融サービス」や「テレマーケティング」、「企業法務」や「学校管理」など「管理部門」に携わる人の数は三倍にも増した（4頁）。グレーバーが第一に「ブルシット・ジョブ」と呼ぶのは、こういった「管理部門」に関わる無駄な仕事である。（そしてグレーバー曰く、企業の「容赦ない人員削減」の対象となるのは、不思議なことに、決まって「生産に携わる仕事」、有益な仕事をしている人たちの方なのである（5頁）。）ブルシット・ジョブに就いている人間は、しばしば自分の仕事の無意味さに苦しみ、社会に何の貢献もしていないことを惨めに思っている。ドストエフスキーの有名な言葉にあるように、一人の人間を完全に打ちのめす最も効果的な方法は、全く何の意味もない無駄な仕事をさせることなのである。

冒頭で紹介した、スペインの公務員も、無益な仕事に破滅しそうになった人間の一人であった。自分の仕事に意味が見いだせず、一時は深刻な鬱状態にもなった彼は、自宅で意味のある仕事（スピノザの研究）に没頭することで、精神的な危機を乗り越えようとしたのである。ごく普通に考えて、ここで最も驚くのは、6年間、彼が出勤していないことに誰も気付かなかったという事実である。が、それくらい、本当に無意味な仕事だったのだろう。この公務員はたまたま欠勤が発覚して罰金を科せられることになったが、ブルシット・ジョブに就いている人間で、欠勤はしないまでも、似たようなことをしている人間は確実にいる。これは、短期間ならば一というのもこの場合ですら、しばしば「いちじるしく両義的」なのである—それほど悪いことではない（378頁）。実際、持て余した勤務時間を、小説を読むなど自らの向上や楽しみのためにあて、ブルシット・ジョブと幸せを両立している人々の声も本書の中で紹介されている。

しかし、皆が皆これほど運が良い(?)訳ではない。グレーバーが第二に「ブルシット・ジョブ」と呼ぶのは、ピラミッドの上層部の人間のものではなく、下層の人間のものである。彼らは何もすることがない、という点で上記の人たちと同じだが、自分の楽しみのために暇つぶしをする自由を持たない、という点で異なっている。というのも雇用主の中には、雇用者の時間を買っているという観念から、ひどい時には監視カメラまでつけ、無意味な雑用を押し付けて忙しく働かせようとする人たちが少なくないのである。

例えばある小さな業界誌の受付係は、あるとき上司に何千ものペーパー・クリップを色別に分けるように命じられてその通りにした。ところがその上司は、クリップを使用する際、少しでも色に頓着している様子はなかった。つまり、この色分けの仕事は、受付係に自由な時間を与えないための無意味な雑用に過ぎなかったのである。

またある博物館のガードマンは、博物館の中の空き部屋を守ることが仕事で、そこに観覧者が立ち入ったり、放火したりしないように注意を払わねばならなかったが、その際に本を読むなど注意をそらす「精神的刺激」は一切禁じられていた(134頁)。本を読むことで異変に気づくのが遅れるのが、せいぜい2、3秒だったとしても、それは許されないことなのであった。

ここにブルシット・ジョブのブルシット的性格がよく表れている。つまりそれは「演技」(make believe)である(146頁)。グレーバーは「ブルシット・ジョブ」を5つのタイプに分けている。

1. 取り巻き (flunkies)

誰かを偉そうに見せたりするためにやってもやらなくてもいい雑用を肩代わりする仕事。ドアマンや受付係など。

2. 脅し屋 (goons)

雇用主に代わって他人を傷つけたり、欺いたりする仕事。顧問弁護士や広報係など。

3. 尻ぬぐい (duct tapers)

そもそも存在してはいけない構造上の欠陥や上司のミスを修正する、本来ならやらなくてもいい仕事。例えるならば、家の屋根が雨漏りしているのに、屋根を直さず、バケツに溜まった雨水を捨てるために雇われた仕事がこれにあたるという。

4. 書類穴埋め人 (box tickers)

組織が実際にやっていないことをやっているかのようにみせかけるために存在する仕事。調査管理社、企業コンプライアンス担当など。

5. タスクマスター (task masters)

他人に無意味な仕事を割り当てるために存在している仕事。「ブルシット・ジョブ」を創り出す仕事。中間管理職など。

することがないのに、忙しいふりをすること、することがないから、不必要な仕事を必要であるかのように振舞うこと、することがないから、不必要な仕事をあえて創り出すこと。こうした「仕事もどき」の行為が「ブルシット・ジョブ」の主な共通項である(338頁)。ここに、効率的なイメージとは程遠い、現代資本主義社会の現実がある⁷。

グレーバーによれば、こうした非効率性こそ、人々が「ブルシット・ジョブ」の存在を無自覚に許し、急増させている第一の要因だという。つまり、市場経済が、このように非効率であ

るという現実が、資本主義の常識とあまりにかけ離れていて、人々が直視するのを「拒絶している」のである（198頁）。ソ連およびその他の社会主義国の崩壊が、「われわれは働いているふりをし、彼らは給料を支払うふりをする」、という言葉に象徴されるような、「演技」及び非効率にあったのだとすれば、資本主義者社会においてそのようなことは、絶対にあってはならないことだからである（198頁）。

「ブルシット・ジョブ」がはびこる第二の要因は、あってはならない現状が仮に認識された時でも、「根本から誤った説明方法」がなされていることである（199頁）。製造業の衰退に伴い、「サービス経済」が増えているという一般認識があるが、それは誤りで、サービス部門はさほど拡大していないという。拡大しているのは FIRE 部門（金融（finance）、保険（insurance）、不動産（real estate））という「情報労働」である（200頁）。そしてこの領域こそ、ブルシット・ジョブの温床となっているという。

また、アイン・ランド、ハイエク路線の市場経済主義者からの説明には、大きく分けて二つあるという。一つは、資本主義社会においても「ブルシット・ジョブ」は存在するが、それは公共部門のみで、効率を追求する民間部門には存在しない。民間企業において「ブルシット」だと皆が思っている仕事は、一見何の意味がないように見えても、何らかの役割を果たしており、実際には意味があるのだ、という主張である。昔工場で働いていた労働者が、仕事の単調さを無意味に思ったように、現代の会社員は書類仕事に虚しさを感じていて、無意味だと思っただけだということである。そしてこのように主張する人の中には、現代の会社員の教育レベルが高く、哲学やルネサンス文学を学んだ者も多いので、高い理想に現実がかみ合っていないだけだという人もあるという。もう一つの説明は、民間に「ブルシット・ジョブ」が存在することを認めるが、これは政府の介入の結果であるという議論である。

グレーバーは第二の議論に理解を示しつつも、どちらの説明も間違っていると言い切る。その例として、アメリカの大学の現状をあげている。すでに見てきたように、現代資本主義社会は、生産に関わる労働者が少なく、行政に関わる労働者が圧倒的に多いという頭でっちな逆三角計形の産業形態を持っている。これと似たような構図が大学にも見られるというのだ。つまり教育したり、研究したり、「生産に携わる仕事」を担うのが学者だとすると、行政はピラミッドの上に位置する行政スタッフだが、その数は1975年と2005年の比較データにおいて、私立の方が公立の二倍にも増えている。グレーバーによれば、これは明らかに政府介入の結果ではなく、今日の（私立）大学が、好んで非効率化しているのである。

では、ブルシット・ジョブの存在が、経済効率では説明できないとなると、一体どこにその存在理由があるのであろうか？グレーバーは政治的・文化的要因にその答えを求める。グレーバーによれば、今日資本主義と呼ばれているシステムは、アダム・スミスなどが論じたような意味での資本主義、つまり経済効率を最大限に追求するシステムではない。それは、「経済の命法」と「政治の命法」とが融合した、「中世封建制」に近いという（252頁）。グレーバーは

これを「経営封建制」と呼んでいるが、これは「ヒエラルキーのためのヒエラルキーへの執着によって特徴づけられる」(239頁)。つまり「経営階級」こと上流階級が、自らの権威や地位を保つために、非効率なブルシット化をあえて進めているのである。グレーバーはこのシステムの「特異な性質」こそ、ブルシット・ジョブを増殖させている政治的要因であるという(315頁)。実際今やアメリカは、ソーシャル・モビリティ(社会的流動性)の最も低い国の一つだという。ハリウッドでは二代目三代目が多数占めているし、弁護士、医者、学者、政治家(右左を問わず)も然りである。「リベラル・エリート」の産物である彼らに、ブルシット・ジョブを廃止するインセンティブは存在しない(325頁)。なぜなら彼らは、「働く大衆が膨大な余暇を手中にしたら増長してなにをしでかすかわからない」という「上流階級の恐怖」を持っているからなのだ(341頁)。そしてこれは、労働者側の文化的要因、つまり「労働はそれ自身が道徳的価値」であり、辛い有給の仕事をしてこそ「一人前の大人とみなされる」という近代の労働観と相まって、「ブルシット・ジョブ」を常態化させ、新たな「封建主義」を創り出しているのである(5, 290頁)。

ただ、中世の封建制と決定的に違うのは、現代の「封建主義」には、中世の持っていた「自治の原則」が存在しないことである(234頁)。例えばグレーバーが言うように、1950年代、60年代までは、大学はまだ中世のギルド的性格を残していて、学者による学者ための機関であり、学者以外の人間が学者の仕事に口を挟むということは考えられなかった。ところがこれが現代では全く違うものになってきている。グレーバーがあげている、オーストラリアのクィーンズランドの大学の例にあるように、シラバスを書くにも、行政の指示に従わなければならない、例えば何が素晴らしい歴史のコースなのかを決める決定権が、学者ではなく、行政の側にある、という異常な事態を生み出している。これによって学者と行政のやりとりが、何倍にも複雑になっているのである。グレーバーはここに「実質ある仕事のブルシット化」、あるいは「ブルシット部門」の急増要因があるという。それは、「数量化しえないものを数量化しようとする」試みである(337頁)。つまり何が素晴らしい歴史のコースなのか、という学者の思いは「ケアリングの価値」であり、これを画一したフォーマットに収まるよう数値化すると、大変な無理と無駄が生じる(337頁)。というのも、「コンピューターが認識できるような形式へ転換するには、膨大な人間労働を必要とする」からである(337頁)。昨今よく耳にする、AIによって人間が単純労働から解放され、より創造的な活動に従事できる、という意見は、一面において間違っていない。しかし、気を付けなくてはならないのは、「自動化は特定の作業をより効率的にするが、同時に別の作業の効率を下げる」という事実である(337頁)。何が数値化され得るのか、され得ないのか、という点を人間がしっかり判断しなければ、社会の「ブルシット化」が進むばかりである。

人は無意味な仕事には耐えられない。「ブルシット・ジョブ」の蔓延は、明らかに市場の失敗である。もちろんだからといって、グレーバーの資本主義批判を社会主義の推進と捉えるの

は、飛躍である。グレーバー自身は「無政府主義者」だそうで、社会主義国の「見せかけ」を指摘していることから、それを望んではないだろう。グレーバーが打ち出しているのは、資本主義の枠内での解決策、つまりユニバーサル・ベーシック・インカムと短時間労働である。確かにこれは、「生活を労働から切り離」して仕事のブルシット化を防ぐ、魅力的な選択肢の一つだろう（367頁）。

ただ、評者自身は、もう少し市場に対して楽観的である。現在どこも「ブルシット・ジョブ」が蔓延しているかもしれないが、それはまさに、市場の原理とのイメージと違いすぎて、これまではっきり認識されていなかったからに他ならない。今やグレーバーの指摘によって、私たちははっきりそのことを認識している。そして資本主義というのは、やはり最終的には「経済の命法」で動くものである。パンデミックなどで景気が厳しくなる中で、「ブルシット」の多い会社とそうでない会社があったら、将来的に、「ブルシット」の多い会社は淘汰されていくだろう。

グレーバーは本書の最後で、「本当に自由な社会とは実際どのようなものか」考え、議論してほしいと言っているが、本気でこの課題に取り組む会社（あるいは大学など）が少数でもあるならば—評者が認知していないだけです—であるのかもしれないが—、これによって社会は変わっていくだろう（364頁）。もはや失敗から目を背けている余裕はない。ベルリンの壁崩壊から30余年、私たちは、今一度、初心に戻って謙虚に、そして真摯に、自由主義社会・資本主義社会の在り方を考え直す必要があるといえよう。

注

- 1 David Graeber, *Bullshit Jobs: A Theory*, New York: Simon and Shuster, 2018.
- 2 グレーバーは大学を卒業した人で、無意味なオフィス仕事に嫌気がさし、「日々のまっとうな仕事をしているという実感を得るべく」、清掃員になった三人について言及している（370頁）。
- 3 「シット・ジョブ」がいかに社会に必要とされているかについては、1968年にニューヨークで行われたゴミ収集者によるストライキの例を見れば明らかであろう。このストライキによって、たった十日間で街が「居住不可能」になってしまったのである。グレーバーが言うように、これはその2年後の1970年にアイルランドでの銀行員によるストライキとは対照的だった。このストライキは6か月も続いたのにも拘らず、大半の人々が小切手を切り続け、それが貨幣として流通したために、「日常生活にはなんの変化もなかった」のである（274頁）。
- 4 David Greaver, "On the Phenomenon of Bullshit Jobs", *Strike!*, August 2013, available at <https://www.strike.coop/bullshit-jobs/>.
- 5 Greaver, "On the Phenomenon of Bullshit Jobs".
- 6 もちろんグレーバーが言うように、何が「ブルシット・ジョブ」で何が意味ある仕事かという「社会的価値の客観的な尺度」など存在しない。後にグレーバーが「ブルシット・ジョブ」と

してあげている仕事の中にも、ブルシットではないものもあるかもしれない。「ブルシット・ジョブ」とは「自分の仕事が無意味なものだと本人が確信している」ときに言えるものである(6頁)。

- 7 そしてグレーバーは、このブルシット・ジョブにおける「演技」こそ、youtube や facebook などのソーシャル・メディアが「旋風を巻き起こした」原因だとみている。つまり、ソーシャル・メディアとは、「基本的には、何か別のことをするふりをしながら生産され消費される電子メディアの形態」なのであり、忙しいふりをするブルシット・ジョブとは相性がよいのである(187頁)。